



水島恵一先生 自筆の墨絵

水島恵一先生のご逝去を悼んで

文教大学生生活科学研究所の創設提案者であり、元家政学部・人間科学部教授、家政学部長、人間科学部長、人間科学研究科長、文教大学学長を歴任された水島恵一先生が2015年7月27日にご逝去された（享年86歳）。謹んで水島先生のご冥福を心からお祈り申し上げたい。

私は本年度より生活科学研究所所長を拝命したが、残念ながら水島先生には一度もお目にかかる機会を得ることがないままに先生の訃報に接することとなった。直接お目にかかることができなかったことを、今も大変残念に思う。しかし、奇しくも2015年度は本学創設90周年を迎えるにあたり90周年史編纂の年であるため、私は生活科学研究所に関する原稿を執筆する機会を頂戴した。そのために過去の資料に目を通す中で、私は水島恵一先生がいかに生活科学研究所の創設に強い情熱を傾けられてきたかを知った。

水島先生は、1976年に生活科学研究所の前進となる研究部を計10名の構成員で設立した当初から、「人文・社会的な面と自然科学的な面を融合させ、『生活している人間』という観点から学としての生活科学を開拓する」という崇高な目的を掲げ、実践科学としての総合性を重視する生活科学、人間科学を提唱された。先生はその目的の達成を目指し、生活科学研究所には多様な専門分野の研究者が集い、活発に研究活動が行われるための条件整備や、公開講座を通じた地域貢献活動等の教育活動に熱心に取り組まれた。先生のご尽力に改めて心から敬意を表したい。

水島先生が礎を築いて下さった本学の生活科学研究所は、今後も先生のご意志を受け継ぎ、さらにその研究・教育活動を発展できるよう私たち後進のものが一丸となって取り組んで参りたい。そうした研究所所員全員の思いが天に召された先生に届くことを願い、追悼の辞としたい。

追記：

水島先生の膨大な研究業績を全てここでご紹介することはできないが、本学を2001年3月にご退職された折に、人間科学部紀要『人間科学研究』第22号に掲載された水島先生のお写真、主なご経歴と単著書籍・論文のみを本研究所紀要で再掲することとした。また、水島先生のご指導を直接受けられ、長年にわたり生活科学研究所の運営に携わってこられた佐藤ひろみ助手にも追悼の辞をお願いした。

生活科学研究所所長 金藤ふゆ子

水島恵一先生の経歴・ご著書

主な経歴

1928年8月東京生まれ。東京大学法学部卒業。同大学文学部心理学科大学院修了。文学博士。横浜少年鑑別所技官（1951～1955年）。東京都児童相談所技師（1955～1963年）。立正女子短期大学・大学助教授（1966年）、立正女子大学教授（1967～1976年）同大学家政学部長（1972～1976年）。文教大学人間科学部教授、同大学人間科学部長（1976～1992年）、大学院人間科学研究科長（1993～1996年）、文教大学学長（1996～2001年）、文教大学名誉教授。

研究業績

〈単著書籍・論文のみ〉

1. 「非行少年の設置（治療）方法」『刑政』67-11（1952）
2. 「或る少女の自由連想」『児童心理と精神衛生』4-1（1953）
3. 「追従的不良行為の一分析」『児童心理と精神衛生』4-3（1954）
4. 「学校における問題行動とそのなりゆき——非行少年の予後調査」『カリキュラム』72（1954）
5. 「失敗時における皮膚電気伝導度と呼吸」『心理学研究』25-3（1954）
6. 「歪められた女性」小口・松村編『女の心理』（福村書店、1955）
7. 「社会病」（白亜書房、1956）
8. 「非行少年の社会的予後に関する研究（1）～（3）」『教育心理学研究』2-4,3-2,4-2（1955～1957）
9. 「最近の非行理論の批判」『心理学研究』28-2（1957）
10. 「青少年不良化の原因とその治療」『青少年問題』4-2（1957）
11. 「非行のいろいろな型とその処置法」（連載1～4）『青少年問題』4-6～9（1957）
12. 「児童社会病理と児童福祉」『閉童精神衛生講座』（明治図書、1958）
13. 「社会治療の新しい課題」『社会福祉研究』19（1958）
14. 「わかさ学園建設記」『社会事業』41-5（1958）
15. 「立ち上がった母親たち（精薄児の親の社会活動）」（連載1～11）『社会事業』41-6～42・4（1958～1959）
16. 「非行および非行少年のタイプに応じた効果的処遇の研究」『刑政』70（1959）
17. 「非行少年を更生させる技術の検討」（シンポジウム）『ケース研究』54（家庭事件研究会、1959）
18. 『非行臨床心理学』（新書館、1962）
19. 「非行少年の治療教育の諸問題」『犯罪学年報2：少年非行の予防』（有斐閣、1962）
20. 「児童相談の手引き」東京都児童相談所資料（1962）
21. 「家庭と非行形成」『教育心理学研究』10-1（1962）
22. 「非行者に対する心理療法の効果」『心理学研究』32-6（1962）
23. 「親の立場と子の気持」『青少年問題』9-6（1962）
24. 「非行の臨床的理解の基準」『犯罪心理学研究』1-1（1963）
25. 「非行児にみられる積極性、消極性」『児童心理』17-5（1963）
26. 「アメリカの監獄」『刑政』74（1963）
27. 『青年の悩みと反抗』（雪華社、1963）
28. 『非行少年の解明』（新書館、1964）
29. 「臨床的非行性理論によるケース研究」『犯罪心理学研究』2-4（1964）
30. 「入院心理療法過程に関する研究」『臨床心理学の進歩』（誠信書房、1964）
31. 「問題児を持つ親への教師の指導」『児童心理』18-5（1964）
32. 「臨床心理学的措置」小口、村松編『臨床心理学』（朝倉書店、1964）
33. 『青年の苦悩と共に』（新書館、1965）
34. 「都市の社会病理——近代都市と非行」『年報社会心理学』6（1965）
35. 「成長体験の研究」『心理学研究』38-6（1965）
36. 「非行児の価値観」『児童心理』19-2（1965）
37. 「講座・親と子の精神衛生」（連載1～12）『親と子』（東京民生文化協会、1965）

38. 「少年非行の矯正医学的研究」『矯正医学シンポジウム』14 (1965)
39. 「非行少年の心理療法 (1)、(2)」『児童心理』20-5、20-6 (1966～1967)
40. 「治療過程と治療者の問題」〔臨床心理学講座3〕(誠信書房、1967)
41. 「イメージ面接による治療過程」『臨床心理学研究』6-3、7-2 (1967、1968)
42. 「人格理論の問題点とその臨床的意味」『心理学評論』10-2 (1967)
43. 「ボスと非行集団」『学級経営』19 (1967)
44. 「人格理論の総合的理解と臨床」〔臨床心理学講座1〕(誠信書房、1968)
45. 「集団治療過程の基礎的研究」『精神医学』10-7 (1968)
46. 『社会的発達病理』〔児童心理学講座7〕(金子書房、1969)
47. 『カウンセリング入門』(大日本図書、1969)
48. 『精神衛生と人間実存』(誠信書房、1969)
49. 「非行性の診断」『教育心理』17-11 (1969)
50. 「心理療法におけるロジャース派の位置づけ」『教育と医学』18-1 (1969)
51. 「臨床心理学と学会のありかたについて」『臨床心理学研究』9-2 (1970)
52. 『増補非行臨床心理学』(新書館、1971)
53. 「カウンセリングのあり方」『ニューエコノミスト』244 (1971)
54. “Art therapies in Japan”, *Interpersonal Development*. (1971)
55. “Les phenomenes de imagery mentale et son utilisation clinique”, *psychotherapies*, 2 (SITIM, 1971)
56. 「非行」〔青年期の臨床心理: 児童臨床心理学講座6〕(岩崎学術出版社、1972)
57. 「芸術療法における東洋芸道の位置づけ」『芸術療法』4 (1972)
58. “A psychosocial theory of delinquency”, *Int. J. Soc. Psychiat.* 18-4 (1972)
59. “T-groups and related activities for the recovery of humanity” 国際心理学会シンポジウム (1972)
60. “A new approach to the theory of self” *International Congress of Humanistic Psychology*. (1972)
61. 『自己の心理学』(社会思想社、1973)
62. 『自己探究と人間回復』(大日本図書、1973)
63. 『深層の自己探求』(大日本図書、1973)
64. 『青年カウンセリング』(大日本図書、1973)
65. 「人間回復の集団活動とその理念—Tグループを中心に」『産業訓練』19-5 (1973)
66. 「家政学と人間科学の接点」『立正女子大学紀要』9 (1975)
67. 「生命体験と自己実現」『セルフエイジ』9 (1975)
68. 「臨床的面接法における面接者の要件と訓練」続有恒、村上英治編『心理学研究法11』(東大出版、1975)
69. 「人間学的方法論の明確化」『相談学研究』9-1、2 (1976)
70. 「自我の解放と確立」『月刊生徒指導』6-2 (1976)
71. 『人間科学入門』(編著)(有斐閣、1976)
72. 『人間学』(有斐閣双書、1977)
73. 『自己探究の心理学—非現実の現実』(社会思想社、1977)
74. 「神経症的非行」『教育と医学』25-7 (1977)
75. 「非行少年の理解について」『育てる』108 (1977)
76. 「人間学的実践の原理」『教育展望』24-3 (1978)
77. 「実証的かつ実感的体験研究の方法」『文教大学紀要』12 (1978)
78. 「自己実現の人間科学」現代のエスプリ別冊 (1978)
79. 「嗜癖者に対する治療と指導」『教育と医学』26-2 (1978)
80. 『人間学の実践』(有斐閣双書、1979)
81. 「〈体験と意識〉研究の方法論」文教大学人間科学研究会編『体験と意識に関する総合研究』1 (1979)
82. 「簡素化された3つの投影法による自己深化の過程と方法—今後の臨床的研究の手引きを兼ねて」文教大学人間科学研究会編『体験と意識に関する総合研究』1 (1979)
83. 「人間科学方法論における統合的視点—理論と体験の媒体としてのイメージモデル」文教大学、『人間科学研究』1 (1979)
84. 「生命の核と自己実現—心理的、社会的から見た〈欲望〉の人間学」『日本及日本人』1556 (1979)
85. 「体験の認知的構造—感情体験の理論仮説を中心に」文教大学、『人間科学研究』2、3 (1980、1981)
86. 「図式的投影法を中心としたイメージ・体験研究のレビュー」文教大学人間科学研究会編『体験と意識に関する総合研究』2 (1980)
87. 「障害児の治療教育過程における臨床家の認知変化の研究—図式的投影法によるスタッフの認知を中心に」『安田生命社会事業団年報』16 (1980)
88. 「人間学と人間学的実践」『特別活動』13-4～9(日本文化科学社、1980)
89. 「個性尊重と共感的交わり」『特別活動』13-1

- (1980)
90. 『パーソナリティー』(有斐閣双書、1981)
 91. 「心理測定、診断、治療をかねた図式的投影法」『相談学研究』13-2 (1981)
 92. 「図式・イメージを中心とした体験と意識の総括」文教大学人間科学研究会編『体験と意識に関する総合研究』3 (1981)
 93. 「図式的投影法による総合研究」文教大学人間科学研究会編『体験と意識に関する総合研究』3 (1981)
 94. 「人間学的心理学とカウンセリング」『サイコロジー』(1981)
 95. 「健全育成のための〈人間学的〉教育」『教育経営研究』9-1 (1981)
 96. 「人間学の知見と教育」『教育展望』28-3 (1982)
 97. 「心と現実以前の原点」『日本及日本人』1566 (1982)
 98. 「東洋芸道による精神療法」徳田良仁他編『精神医療における芸術療法』(牧野出版、1982)
 99. 「イメージとは」『教育と医学』31-1 (1983)
 100. 「人間性心理学の方法と展望」『人間性心理学研究』(1983)
 101. 「非行臨床家のジレンマを正視する」『更生保護』34-7 (1983)
 102. “Basic relationship among intrapsychic, interpersonal and social conflicts, and their solution” 10th World Congress of Social Psychiatry. (1983)
 103. 「児童非行について—親子関係を中心」『子どもと家庭』21-7 (1984)
 104. 「生物心理的システムと社会的システムの対応」『大正大学カウンセリング研究所紀要』7 (1984)
 105. 「実験的に形成された共同自己の体験」文教大学『人間科学研究』6 (1984)
 106. 「人間と社会における自然性と人工性」文教大学『人間科学研究』6 (1984)
 107. 「〈非ユークリッド的〉自己理論」『人間性心理学研究』3 (1985)
 108. 「カウンセリングにおける診断と理解」『へるす出版』11-6 (1985)
 109. 「社会病理の臨床的理論」文教大学『人間科学研究』8 (1986)
 110. 「日本の社会病理現象(1)~(3)」文教大学『生活科学研究』8~10 (1986~1988)
 111. 「カウンセリングと人間性心理学」『青年心理』(特集カウンセリング) 64 (1987)
 112. 「協調・連帯と自立・自己実現—教育における集団と個人」『教育展望』33-4 (1987)
 113. 「トランスパーソナル心理学について」『春秋』293 (1987)
 114. “An integrative theory of imagery related to typology” 3rd International Conference of Imagery: Keynote Address. (1988)
 115. 「イメージ療法の理論と技法」(心理療法 Q and A 現代のエスプリ) (至文堂、1988)
 116. 「カウンセリングの意味」NHK 学園 (1988)
 117. 「人間学的心理学」〔本明寛編 講座・性格心理学 新講座1〕(金子書房、1989)
 118. 「日本人間性心理学会」『教育心理』37-5 (1989)
 119. 『人間性心理学大系』全10巻(大日本図書、1985~1989)
 - 1 巻『人間性の探求』(1985)
 - 2 巻『カウンセリング』(1985)
 - 3 巻『イメージ・芸術療法』(1985)
 - 4 巻『教育と福祉』(1987)
 - 5 巻『自己と存在感』(1986)
 - 6 巻『意識の深層と超越』(1988)
 - 7 巻『臨床心理学』(1986)
 - 8 巻『非行・社会病理学』(1987)
 - 9 巻『イメージ心理学』(1988)
 - 10 巻『人間学への道』(1989)
 - 別巻Ⅰ『愛と反抗の群像』(1991)
 - 別巻Ⅱ『深層の世界』(1991)
 120. 『人間の可能性と限界—真の自己を求めて』〔シリーズ人間性の心理学〕(大日本図書、1994)

上記の研究業績は、水島恵一先生がご退職の折に人間科学部紀要第22集に掲載された業績一覧の中から、単著書籍・論文のみを再掲したものである。

水島恵一先生のご逝去を悼んで

2015年7月27日、生活科学研究所を設立された水島恵一先生は御逝去されました。

研究所の仕事が一段落したら、軽井沢へ避暑に出掛けられないうちにお見舞いにお訪ねしようと思っていた矢先のことでした。昨年1月には体調を崩されて入院なさっておられましたが、研究所紀要第37集への掲載をお伝えしましたら、大変お喜びになられたと御長女の陽子様から伺っておりました。その頃は声も出にくく筆談でご指示されたとお聞きしました。

先生は1966年より本学に奉職された35年の間、本学家政学部学部長、人間科学部学部長、人間科学研究科長、本学学長を歴任され、とくに人間科学部の創始者としても本学に多大なご貢献をなさいました。また、生活科学研究所は水島先生のご提案により、昭和51年に家政学部の発展的解消を機に生活科学研究部として設立され発足いたしました。研究所設立当初は、元家政学部長であった水島先生の呼掛けで家政学部の先生方や助手と共に、個々の専門分野を活かしながらまとめる方向性を、学問領域の接点を模索されておりました。先生のご発案で個々のテーマを持ち寄ることで、取り敢えず共通の接点を創られました。そして「元荒川流域の生活実態調査」のスタートとなりました。

水島先生は学生指導も大変ご熱心で、研究部ではエコロジーグループの学生達との交流が思い出されます。毎週一回は5、6人の人間科学部の学生達に囲まれて、昼食を共に召し上がっておられました。学生の研究テーマは水質問題や自然食品、添加物問題、テレビコマーシャルについてなど、日常の生活の中の問題で、当時の社会問題となり注視されていたものでした。学生と歓談しながら、一人一人の話しに耳を傾けられていたお姿が思い出されます。葬儀にはその学生の内の何人かが、駆けつけておりました。中には他大学で心理学の教授を務める卒業生もおり、皆同じ頃の水島ゼミの卒業生でした。先生と交流が続いていたのですね。追悼文を書き始めてから様々な思い出が走馬灯のように出てまいります。図式投影法セット試作の思い出：先生がご考案され心理分析に役立っている図式投影法についても、考案段階でお手伝いできたことを光栄に思います。当時病欠で長期休職の後復職した私に、図式投影で使用する感情カードと駒（人）の試作を任されました。投影法の被験者役にもなり試作の効果も試しました。静かな環境をとのご配慮であったと感謝しております。墨絵と第九と讃美歌：先生がご趣味とされていた墨絵はスケールが大きく、何枚にもわたって描かれた松の襖絵は見事なものでした。当時、先生のゼミ学生の記憶にはとくに印象深かったようで、今でも当時の卒業生が集まると思い出としてよく語られています。東日本大震災の津波で生き残った一本の松が描かれた賀状は、先生の慈しみ深い思いが込められているようでした。一昨年、ご自宅へお伺いした際には、ドイツの楽曲から讃美歌まで、ピアノの伴奏もご自分で弾かれて、次々に数曲を歌われました。「すっかり声が細くなってしまいました」との奥様のお言葉が思い出されます。かつて人間科学部のパーティーでは、お得意の第九やゴンドラの歌などを豪快に披露されておりました。また先生は桜並木が大変お好きでした。ご家族か

ら頂いたお写真のメモに恵一観桜会とあるほどで、昨年は車椅子でご覧になっておられたようです。玉川上水の桜並木がことのほかお気に入りのようでしたが、大学前の元荒川堤が桜の時期になると、駅から桜堤を遠回りして大学に来られるのが楽しみのようにございました。

先生が中心となり、スタートさせた紀要「生活科学研究」は第38集となり、入稿数も30編を超え、発刊へと向かっています。12月に毎年度開催される研究報告会も熊本や大阪といった遠くから客員研究員が参加しております。今年度は先生のご友人で、筑波大学名誉教授の臺利夫先生をお迎えしてご報告戴き一層充実したものとなりました。また研究所の研究領域も社会福祉学、心理学諸領域、教育学、社会教育学、経済学、文化人類学等々、全学部の教員の専門領域とも重なり一層幅広くなりました。人間科学部、教育学部の他に、国際学部、情報学部、健康栄養学部教員の投稿も加わり、かつて先生がご指摘された人間の生活を基盤とした学びの領域は一層広がりました。今後はさらに先生がご提唱された水島生活科学、水島人間科学に基づいて、これらを如何に繋げて、人間の生活の学として紡いでいくことが大切であると考えます。

日本の心理学のパイオニアとしてのみならず、心理学で培われた視点から、人間の実際の生活の基盤に立った学問の必要性、学問領域の接点の大切さと真摯に取り組まれた、水島恵一先生の長年のご研究とご指導、文教大学へのご貢献に感謝を捧げ、心からご冥福をお祈り申し上げます。先生、多くのお教えを有難うございました。

合掌

追記：生活者による科学

研究部の発足にあたって水島先生が生活科学研究に寄せられた論稿のなかで“生活者による科学”について次のように述べておられます。

『人間の生活を全体的にとらえて行こうとする生活学の理念とともに大事なこととして、高度の専門性、アカデミックな能力、研究設備と時間等々に恵まれてなされる学だけが生活学ではなく、そこには「生活者による学」(人間・生活科学)という一面がなければならない。もちろん専門的な高度な研究は不可欠であり、時には大前提である。生活学は単に専門諸科学の生活事象への応用でもなく、また単に生活に関する総合科学でもない。たとえささやかな部分的研究であっても、個々の生活の現実の生活に立脚するものであれば、人間と生活に根ざす基盤を見失わないかぎり、かけがえのない意味を持つであろう。さらにその実践によって創造され、開拓されることこそが望まれる。』と提唱されています。旅立たれた今、反省とともに改めて心に刻む次第です。

生活科学研究所研究員 佐藤ひろみ